

山村暮鳥全集

第一卷

山村暮鳥全集

第一卷

初版發行者　田曲村行　昭和三十六年十二月五日
二版發行者　和篤暮　昭和四十八年七月十日
著者　鳥者　者子　者平所
発行者　和篤暮　昭和四十八年七月十日
印津　行　行
新宿区中町十八所
東京都新宿区中町十八所
電話(二六〇)三七〇七
株式会社彌生書房

0392-6124-8525

山村暮鳥全集

編集

伊藤信吉 草野心平 土田ふじ子
壺井繁治 花岡謙二 人見円吉
藤原定 室生犀星 山室 静

山村暮鳥全集

第一卷
目次

初期及び「三人の処女」

時代 JR

時雨 JR
暁 JR
花のうれひ JR
柳のほとり JR
樹の幹により JR

独唱 JR
黒き猫 JR
河岸 JR
心 JR
とかげ (E.泰記) JR
沈思と懸想 JR
沼 JR
IDEAL JR

初期詩篇 JR

金雀花 JR
蝶と暁の神経 JR

夜店 JR

睡眠 JR
冬 JR
2 JR
1 JR
眺望 JR

最初期詩篇から JR

五月の詩 JR
春と若き人々の思想 JR

『LA BONNE CHANSON』 JR

II 性慾と靈智 JR
冬の辞 JR
孤独と執着 JR
途上所見 JR

壁 JR
画 JR
春 JR
虫 JR

春 JR
蟲 JR

『自然と印象』から JR

線條 JR
影 JR
LONGING JR
睡眠の時 JR
疲労 JR

『三人の処女』 JR

病めるSに JR
檻桟の匂ひ JR

III 声 JR

秋風の悲しき彈奏 JR
月夜 JR
午後のはゝ笑み JR
洋館の青き恋 JR
冬 JR

航海の前夜 JR
病めるSに JR
檻桟の匂ひ JR

『三人の処女』 JR

人生 JR

勤行夜牀章 JR
猫 JR
BEAUTY JR
愛 JR

秋風の悲しき彈奏 JR
月夜 JR
午後のはゝ笑み JR
洋館の青き恋 JR
冬 JR

I 創造の悲哀 JR

力	力	力
光	明石町のシヅエ様に	明石町のシヅエ様に
えび	えびそおど	えびそおど
かほ	かほ	かほ
騒擾	騒擾	騒擾
AT HER GRAVE	AT HER GRAVE	AT HER GRAVE
冬の歌	冬の歌	冬の歌
雪	雪	雪
春	春	春
水辺にて	水辺にて	水辺にて
1 水かけらみの歌	1 水かけらみの歌	1 水かけらみの歌
2 聖職	2 聖職	2 聖職
三人の処女	三人の処女	三人の処女
理性的廃園	理性的廃園	理性的廃園
ECSTASY	ECSTASY	ECSTASY
墓碑記	墓碑記	墓碑記

戯の上の哀歌	戯の上の哀歌	戯の上の哀歌
SONATA	SONATA	SONATA
1	1	1
2	2	2
SILHOUETTES	SILHOUETTES	SILHOUETTES
1	1	1
2	2	2
3	3	3
悲痛を論ず	悲痛を論ず	悲痛を論ず
愛惜と悲哀	愛惜と悲哀	愛惜と悲哀
夜(夏の RYTHME)	夜(夏の RYTHME)	夜(夏の RYTHME)
黒いもの	黒いもの	黒いもの
すけへわ	すけへわ	すけへわ
愛	愛	愛
小曲	小曲	小曲
1	1	1
2	2	2
3	3	3
NOCTURN	NOCTURN	NOCTURN
銘(島崎藤村様に)	銘(島崎藤村様に)	銘(島崎藤村様に)
木犀	木犀	木犀
蟋蟀	其他	其他
憧憬	憧憬	憧憬

かげ	かげ	かげ
L'ETE	L'ETE	L'ETE
無常と月光	無常と月光	無常と月光
影の ELEGIE	影の ELEGIE	影の ELEGIE
桔梗と蝶	桔梗と蝶	桔梗と蝶
哀悼	哀悼	哀悼
賜物	賜物	賜物
廃園辞	廃園辞	廃園辞
卓上	卓上	卓上
賦	賦	賦
雨	雨	雨
風景	風景	風景
午後	午後	午後
秋の日の事実	秋の日の事実	秋の日の事実
I 噴水	I 噴水	I 噴水
II 所現	II 所現	II 所現
III 屋根の草	III 屋根の草	III 屋根の草
IV 不可解	IV 不可解	IV 不可解
初稿本『三人の処女』	初稿本『三人の処女』	初稿本『三人の処女』
から	から	から
劇場にて	劇場にて	劇場にて
生物	生物	生物

雪の翌日	七
黄い月	七
午睡	七
記憶	七
猫	七
私の希望は	七
3	七
2	七
2	七
1	七
秋の歌	七
I	七
遠景	七
II	七
恋	七
III	七
蟋蟀	七
IV	七
秋の歌	七
V	七
水色の暗示	七
A	七
麿哥小曲	七
B	七
途上所見	七
C	七
朝	七
D	七
風物	七
E	七
低唱	七
F	七
街上	七
G	七
感觸と写生	七
H	七
街上	七
I	七
感觸	七
J	七
街上	七
K	七
街上	七
L	七
感觸	七
M	七
街上	七
N	七
街上	七
O	七

『聖三棱玻璃』時代

大宣辭	曲線	や
手	手	や
だんす	だんす	や
图案	图案	や
妄語	妄語	や
烙印	烙印	や
愛に就て	愛に就て	や
青空に	青空に	や
Â FUTUR	Â FUTUR	や
樂園	樂園	や
発作	発作	や
曼陀羅	曼陀羅	や
かなしそひ	かなしそひ	や
岬	岬	や
十月	十月	や
印象	印象	や
持戒	持戒	や
光	光	や
模様	模様	や
氣稟	氣稟	や
くれがた	くれがた	や
さりゆゑあしょん	さりゆゑあしょん	や

鑑心抄

完

小曲	10K	雨	11K
春	10K	暁の月	11K
空	10K	黒	11K
汝に	100	冬のはじめ	11K
嬢素	100	ある時	11K
午後	100	心	11K
風景	101	鳥	110
誘惑	101	地上	110
冬	101	薔薇	110
いのり	101	小景	111
雪	111	ある時	111
微風	111	智慧の木	111
悲曲 其一	111	内心	111
悲曲 其三	111	なつのあしたを	111
幸福	111	壺	111
窓	111	蔓	111
いきもの	111	かぜ	111
沈黙	111	人魚の歌	111
はつ夏	11K	発心	11K
花	11K	眞実に	11K
ある時	11K	秘唱	11K
なつのまひるを雪がある	11K	信楽	11K
雪 其他	10K		
らんぶ	10K		
りたにい(1)	10K		
りたにい(2)	10K		
I	10K		
II	10K		
小曲	10K		

『黒鳥集』

10M

小曲	111	雨	11K
春	111	暁の月	11K
空	111	黒	11K
ゆらぐもの	110	冬のはじめ	11K
I	110	ある時	11K
II	110	心	11K
III	110	鳥	110
造り花	110	地上	110
いのり	111	薔薇	110
雪	111	小景	111
微風	111	ある時	111
悲曲 其一	111	智慧の木	111
悲曲 其三	111	内心	111
幸福	111	なつのあしたを	111
窓	111	壺	111
いきもの	111	蔓	111
沈黙	111	かぜ	111
はつ夏	11K	人魚の歌	111
花	11K	発心	11K
ある時	11K	眞実に	11K
なつのまひるを雪がある	11K	秘唱	11K

雪 其他	10K
らんぶ	10K
りたにい(1)	10K
りたにい(2)	10K
I	10K
II	10K
小曲	10K

ひかり	冬くれば.....	[二三]
ある時.....	[二三]
模造真珠.....	[二三]
新生.....	[二三]
種子.....	[二三]
小曲.....	[二三]
芽.....	[二三]
静物.....	[二三]
印象.....	[二三]
みらくる.....	[二三]
よふけ.....	[二三]
大筆露章.....	[二三]
I.....	[二三]
II.....	[二三]
III.....	[二三]
蜀黍烟にて.....	[二三]
あるひとに.....	[二三]
秋の日のこと(1).....	[二三]
秋の日のこと(2).....	[二三]
岬の上にて.....	[二三]
薄暮.....	[二三]
創生の銘.....	[二三]
竹やぶ.....	[二三]

新編『昼の十二時』

立秋	所現	111
りんご	現	111
鳥の歌	現	111
冬	内部	111
2	1	111
冬	内部	111
樹木	理性的廃園	111
こぼろぎ	こぼろぎ	111
人間	人間	111
冬	其他	111
断想(緋青の夜)のために、幕引く	断想(緋青の夜)のために、幕引く	111
犬に	犬に	111
風景	風景	111
垂直に	垂直に	111
現実の上に	現実の上に	111
月光	月光	111
声	声	111
春	春	111
季節の歌	季節の歌	111
雨	雨	111
水辺にて	水辺にて	111
まんどりん	まんどりん	111
妻に――	妻に――	111
理解	理解	111
まどろみ	まどろみ	111
わたしはたねをにぎつてゐた	わたしはたねをにぎつてゐた	111
夕ぐれ	夕ぐれ	111
静物	静物	111
天景	天景	111
雪後	雪後	111
断崖	断崖	111
雪景	雪景	111

おちま	1	1KO
耶蘇	2	1KO
靈道	3	1KO
寶石	4	1KO
静物	5	1KO
銘に	6	1KO
風に	7	1KO
見えざる触手	8	1KO
挿話(TO MARIE E)	9	1KO
薔薇	10	1KO
雨滴	11	1KO
1 (形)	12	1KO
2	13	1KO
プリズム	14	1KO
春	15	1KO
視線	16	1KO
私ではない	17	1KO
地上一心信經	18	1KO
草の中にて	19	1KO
内心	20	1KO
正午	21	1KO
礼拝	22	1KO
ゐもり	23	1KO

おなじく	1	1KA
風景	2	1KA
秘密	3	1KA
鍊金術	4	1KA
玻璃もあこぐ	5	1KA
風景	6	1KA
生理的な風景	7	1KA
じゆびれえしょん	8	1KA
網を投げる人	9	1KA
新しき物の觀方の詩的説明	10	1KA
或る「の音響の物的作用	11	1KA
現実	12	1KA
卓上にて	13	1KA
孤独	14	1KA
肉体の反射	15	1KA
大正二・三・四・五年詩篇編集	16	1KA
ノート(藤原定・伊藤信吉)…	17	1KA
「風は草木にささやいた」時代	18	1KA
「風は草木にささやいた」	19	1KA
詩術	20	1KA
庭園	21	1KA
裝飾	22	1KA
夜景	23	1KA

『風は草木にささやいた』時代

人間の勝利	一二三
自序	一二四
父等は善い友達である	一二五
父上のおん手の詩	一二六
或る朝の詩	一二七
曲つた木	一二八
ランプ	一二九
夜の詩	一三〇
遙にこの大都會を感じる	一三一
何処へ行くのか	一三二
梢には小鳥の巣がある	一三三
春	一三四
II	
萬物節	一四五
種子はさへづる	一四五
或る雨後のあしたの詩	一五六
十字街の詩	一五六
ボプラの詩	一五六
風の方向がかはつた	一五六
翼	一五六
針	一五六
としよつた農夫は斯う言つた	一五六

よい日の詩	一四五
朝朝のスープ	一四五
或る時	一四五
III	
穀物の種子	一五六
彼等は善い友達である	一五六
父上のおん手の詩	一五六
或る朝の詩	一五六
曲つた木	一五六
ランプ	一五六
夜の詩	一五六
遙にこの大都會を感じる	一五六
何処へ行くのか	一五六
梢には小鳥の巣がある	一五六
春	一五六
IV	
人間の午後	一〇〇
雨の詩	一〇〇
荷車の詩	一〇〇
歓楽の詩	一〇一
海の詩	一〇一
ザボンの詩	一〇一
十字街の詩	一〇一
ボプラの詩	一〇一
風の方向がかはつた	一〇一
翼	一〇一
針	一〇一

秋ぐら (TO K. TOYAMA)	一一一
此の世界のはじめも	一一一
こんなであつたか	一一一
ひとりごと	一一一
ひだり	一一一
汽車の詩	一一一
都会の詩	一一一
新聞紙の詩	一一一
都城の詩	一一一
握手	一一一
故郷にかへつた時	一一一
太陽はいま蜀黍煙に	一一一
はいつたところだ	一一一
V	
大鉢	一一〇
一本のゴールデン・バット	一一〇
記憶について	一一〇
収穫の時	一一〇
くだもの	一一〇
VI	
キリストに与へる詩	一一〇
或る淫売婦における詩	一一〇
溺死者の妻における詩	一一〇
大きな腕の詩	一一〇
先駆者の詩	一一〇

VII

自分はさみしく考へてゐる	二二六
岬	二二七
愛の力	二二八
人間の神	二二九
秋のよろこびの詩	二三〇
草の葉つばの詩	二三一
或る風景	二三二
雪ふり蟲	二三三
冬近く	二三四
蟋蟀	二三五
或る日の詩	二三六
或る日の詩	二三七
記憶の樹木	二三八
山	二三九
道	二四〇
初冬の詩	二四一
路上所見	二四二
友におくる	二四三
悪い風	二四四
雪の詩	二四五
世界の黎明を みる者におくる詩	二四五

自分は此の黎明を
感じてゐる

一日のはじめに於て	二二六
自分達の仕事	二二七
偉大なもの	二二八
強者の詩	二二九
病める者へ贈物としての詩	二三〇
或る日曜日の詩	二三一
朝の詩	二三二
大風の詩	二三三
農夫の詩	二三四
人間の詩	二三五
姫婦を頌する詩	二三六
妹におくる	二三七
十字架	二三八
勧祭の詩	二三九
鴉祭の詩	二四〇
貧者の詩	二四一
単純な朝餐	二四二

IX

そここの梢のてっぺんで	二二六
一はの薔がないてある	二二七
雨は一粒一粒ものがたる	二二八
麦畑	二二九
朝	二三〇
人間苦	二三一
わたしたちの小さな烟のこと	二三二

一日のはじめに於て	二二六
自分達の仕事	二二七
偉大なもの	二二八
強者の詩	二二九
病める者へ贈物としての詩	二三〇
或る日曜日の詩	二三一
朝の詩	二三二
大風の詩	二三三
農夫の詩	二三四
人間の詩	二三五
姫婦を頌する詩	二三六
妹におくる	二三七
十字架	二三八
勧祭の詩	二三九
鴉祭の詩	二四〇
貧者の詩	二四一
単純な朝餐	二四二
生みのくるしみの頬糞	二二六
あかんば	二二七
風景	二二八
疾風の詩	二二九
友におくる詩	二三〇
自分はいまこそ言はう	二三一
歩行	二三二
家族	二三三
薄暮の祈り	二三四
跋（土田杏村）	二三五
後より来る者におくる	二三六

X

そここの梢のてっぺんで	二二六
一はの薔がないてある	二二七
雨は一粒一粒ものがたる	二二八
麦畑	二二九
朝	二三〇
人間苦	二三一
わたしたちの小さな烟のこと	二三二
世界の黎明を みる者におくる詩	二三三
その梢のてっぺんで	二三四
一はの薔がないてある	二三五
跋（土田杏村）	二三六
後より来る者におくる	二三七

VIII

世界の黎明を
みる者におくる詩

『梢の巣にて』

序文（有島武郎）	一章	木本
ふるさと	二章	朝農夫
自分は光をにぎつてゐる	三章	かほ
地を嗣ぐもの	四章	地を嗣ぐもの
おくりもの	五章	断章 10
ある時	六章	断章 11
ある時	七章	断章 12
ある時	八章	断章 13
ある時	九章	断章 14
ある時	一〇章	断章 15
ある時	一一章	断章 16
ある時	一二章	断章 17
ある時	一三章	断章 18
ある時	一四章	断章 19
ある時	一五章	断章 20
ある時	一六章	断章 21
ある時	一七章	断章 22
ある時	一八章	断章 23
ある時	一九章	真実に生きようとするもの
ある時	二〇章	莊嚴なる苦惱者の頌栄
ある時	二一章	
船にて	二二章	
萬物節	二三章	
大地の子	二四章	
あらしを讀へる	二五章	
一本の木がある	二六章	
蟻をみて	二七章	
鶴にかかる	二八章	
あらしを讀へる	二九章	
一本の木がある	二九章	
断章 6	二九章	
断章 7	二九章	
『土の精神』	三〇章	
(著者として)	三〇章	
縞鯛の唄	三一章	
一章	三一章	

『土の精神』

(著者として) 三三一

真実に生きようとするもの……
莊嚴なる苦惱者の頌栄……

永遠の子どもに就て	一九三
郊外小景	一九六
朝餉の食卓	一九七
遠いあるさと	一九七
春	一九八
妻と語る	一九九
雷雨の時	二〇一
蟬	二〇一
鶏	二〇一
家常茶飯詩	二〇二
虱捕り	二〇三
聖母子図	二〇四
紙鳶	二〇五
一鉢の花	二〇六
春	二〇七
季節をつげる漁婦達	二〇七
ある時(家常茶飯詩)	二〇八
父に書きおくる	二〇九
ゆふがた	二一〇
鰯に	二一〇
自分はようく知つてゐる	二一一
時計	二一二
黒い土	二一二
雪景	二一二
虹(夢二兄におくる)	二一六
星を聞く(季銭画型におくる)	二一六

麦搗き唄(民謡)	二五六
麦畠にて	二五六
母	二五七
星天に讀す	二五七
田園風景	二五六
庭の一隅	二五六
春	二五六
雪について	二五六
雪景	二五六
冬	二五六
鶴	二五六
走馬燈	二五六
雪	二五六
飛行機	二五六
騒擾	二五九
雪のリタニイ	二五九
くちをとぢ	二五九
首を吊るなら此の木でだ	二五九
陸稲畠を	二五九
自分はこれまで	二五六

『万物節』

喫茶の詩	二五三
くらぶえ	二五四
ちらほらと	二五四
はげしく雨が	二五四
うす濁つたけむり	二五四
遠望	二四五
万人を	二四五
りんごよ	二四五
どこかに自分を	二四五
あんまり幽かな	二五六
海はひえびえと	二五六
憎惡のなかにも	二五六
雨ではない	二五六
とほく	二五六
それは誰のものでもない	二五六
遠天の	二五六
風景	二五六
丘の上では	二五六
あの盥舟を	二五六
冬	二五六
友よ	二五〇
或る日曜日の詩	二五〇
いのちのみちを	二五〇
眼でみたのでは	二五〇
わたしの涅槃に就て	二五〇
秋ぐちは	二五〇

ぶうう	四〇三
冬の着物	四〇四
身自らにおくるの詩	四〇五
わたしは祈る	四〇六
雪	四〇七
なにもかもこれからだ	四〇八
先駆者	四〇九
パン	四一〇
山の麓をゆく汽車	四一一
捷	四一二
帽子をとれ	四一三
何もかも眞実である	四一四
蛙の詩	四一五
自分の詩(房端にて)	四一六
いのちのあるもの	四一七
ある日の詩	四一八
黎明の詩	四一九
夕の詩	四二〇
窓にて	四二一
春	四二二
万物節	四二三
太陽の詩	四二四
蜀黍畑がある	四二五
笊には米が一ぱいある	四二六
日光の詩	四二七
朝	四二八

新編「穀粒」

この鶴を見る	四二九
大光明頌栄	四三〇
雄渾なる山顛	四三一
日本	四三二
陸橋の上にて	四三三
日あたりに	四三四
一枚の櫛	四三五
蚊	四三六
雑草	四三七
冬	四三八
青い天	四三九
風景(加藤一夫氏におくる)	四四〇
眞言	四四一
芽	四四二
かなしあじ	四四三
春	四四四
黒い馬	四四五
遠山にはまだ雪がある	四四六
よく似た人	四四七
瓦斯タンク	四四八
果物	四四九
朝かぜ	四五〇
太陽が見てゐる	四五一
此の眺望は生きてゐる	四五二
暴風雨の中にて	四五三
麦踏み	四五四
友に書きおくる	四五五
蠅	四五六

ふるさとにて	四五七
赤い林檎	四五八
私は雪をまつてゐる	四五九
友に贈る	四五一〇
手	四五一
銀貨	四五二
時計	四五三
見た事聞いた事	四五四
而も君達はめぐまれてゐる	四五五
晩餐	四五六
二つの力	四五七
私も知らない	四五八
労働者	四五九
春	四五一〇
黒い馬	四五一一
遠山にはまだ雪がある	四五一二
よく似た人	四五一三
瓦斯タンク	四五一四
果物	四五一五
朝かぜ	四五一六
太陽が見てゐる	四五一七
此の眺望は生きてゐる	四五一八
暴風雨の中にて	四五一九
麦踏み	四五二〇
友に書きおくる	四五二一
蠅	四五二二

